

母から聞いた原爆 広島駅付近の国鉄食堂で被爆

大谷 博

母は、14歳の時に広島駅近くで被爆しました。その年の春、山口県の小さな島・沖家室島の国民学校を卒業し、4月から国鉄の車掌見習として広島で働くようになったばかりでした。祖母（母の母親）も広島市内で働いていて、被爆と同時に他界したものと思われています。

母が被爆した場所は国鉄職員向けの食堂の中。爆心地から約2キロ離れていましたが、バラックのような粗末な建物で、一瞬にして崩れ落ちたそうです。一緒に働き始めた同郷の友達と食事を終え、一度外に出たのですが、先輩たち数人が食事にやってきたので、一緒に職場に向かおうと中で待つことにしました。座って間もなくでした。不思議な光に包まれたと思うと同時に叩きつけられました。気が付くと建物は崩れ落ち、がれきの中にいました。身に着けていた防空頭巾や救急袋、履いていたものまでもどこか吹き飛ばされて見当たりません。運よくがれきの隙間に入ったので助かりました。音は聞こえなかったと言うので、衝撃と音が一体化してやってきたので、感じるができなかったのでしょう。

呆然としていると、そばにいたおじさんから「あんた、動けるんなら早く逃げなさい」と促されました。柱か何かの下敷きになって動けなかったようです。一緒にいたはずの友達や先輩は見当たりません。おじさんを助けるのは無理だと思って逃げることにしました。外に出て少し広いところに出ると、友達や先輩を見つけることができました。「私を置



いて逃げた」とちょっとだけ恨んだそうです。埋もれていた建物にはほどなく火が付きました。「逃げなさい」と言ってくれた人を助けることができなかったことが今でも悔やまれると言います。

みんなから「顔が血だらけだよ」と言われ、すれ違った人も「血だらけでかわいそうに」と言うので、拭うと手にべったりと血が付きました。痛いわけではなく、不思議に思っていましたが、水道を見つけ顔を洗うと血は出ていません。きっと食堂の中で、誰かの血を浴びたのでしょう。自分たちのほか何人ぐらい食堂にいたか覚えていませんが、大きな釜があって、そばで何人が働いていたようです。自分たちは真ん中あたりに座っていたので助かったけど、窓のそばにいた人はダメだったのではないかと思います。先輩たちと会わなければ、自分たちは外にいたはずです。本当に紙一重で助かったように思います。

みんなで広島から遠く離れた先輩の実家に避難することにしました。そこは、芸備線（広島から三次を経て山陰と結ぶ鉄道路線）の奥の方です。救護所で乾パンをもらい、汽車が動いている矢賀まで歩きました。はじめは裸足でしたが半壊の家に下駄箱が見えたので、履く物を拝借しました。

翌日、職場のことや母親のことが気になり、再び広島に戻りました。焼野原となった広島市内は、黒焦げや半焦げで男女の区別がつかなくなった人の死体、馬の死体があちこちに転がっていました。広島は軍都だったので将校が乗る馬がたくさんいたそうです。悲惨な状況をととても恐く感じ「気持ち悪いね」といいながら歩いていましたが、そのうち何とも思わなくなったそうです。爆心地付近の相生橋まで行くと、先輩の一人が「これじゃあ江波もダメじゃね。でも行ってみる」と言って別れました。自分たちも向洋にある寮に帰りました。

翌日、友達の母親が住む己斐に行きました。山口県出身の二人が、ともに訳あって母親が広島に住んでいたのです。自分の母親のことが心配でしたが、同僚の義父から「探しに行っても無理じゃ」「己斐の小学校で山積みにした死体を焼いとるけど、行ったらいけん。どうせ誰だか分らん」と強く止められました。それでも、身元の分かった人の名簿が警察に張り出されるので、あちこち見に行きました。祖母の姉も祖母を探

して広島市内を歩き回ったそうです。

祖母と母は、別に暮らしていました。早く職場になれるようにと寮に入ることを促されたからです。ずっと会っていませんでしたが、原爆の直前、ふとしたことで会うことになり「こんどはゆっくりね」と言われました。祖母の住まいは横川でしたが、職場は爆心地付近。原爆のさく裂した時刻から、職場かそのすぐそばで被爆したと思われます。母は「虫の知らせかね」と、このことを振り返ります。

約1週間広島で過ごし、焼け野原となった市街地を何度も往復しました。広島は川のたくさんある街です。ほとんどの橋が落ちていたので、普段なら怖くて渡れない鉄橋を歩いて渡りました。国鉄での仕事は、車両と接触して大けがをした先輩の看病が最後です。原爆を生き延びた先輩はその事故で足を切断することになり、結局亡くなりました。国鉄は車掌見習を不要とし、母は仕事が無くなったので故郷に帰ることにしました。

辛い、黒い雨にも当たらず、母に原爆症は出ませんでした。しかし一緒に歩き回った同僚は体の調子が悪くなったという話を伝え聞いたそうです。この方が存命かどうかわかりませんが、直近（たぶん10年くらい前）の同窓会では顔を合わせたそうです。祖母を探しにやってきた祖母の姉は、癌で亡くなっていますが、因果関係はわかりません。

.....

母は東京在住なので年に一度か二度会う程度ですが、その都度原爆の体験や終戦前後の暮らしについて話してくれます。亡くなった私の父が、戦争は二度としてはいけないとよく言っていたことも力を込めて話します。父は、生存率が非常に低かった南洋戦線に行っていました。

2013年に、82歳になった母とともに広島原爆資料館を訪れました。母は、展示された写真や遺品を見て、涙を流しながら「つらい」とつぶやきました。戦争の悲劇が繰り返されてはならないと強く感じました。